

## コロナ禍の正倉院展

当館学芸部長 内藤 栄

第七十二回正倉院展を開催するか、あるいは中止かの判断は、新型コロナウイルス感染拡大の第一波のピークにあった春先に下す必要があった。折しも、当館の特別展「毘沙門天―北方鎮護のカミ―」が会期半ばで閉幕となり、多くの博物館や美術館が休館に追い込まれた時期である。しかし、終戦の翌年に国民を元気づけるために始まった正倉院展を、ここで止めてはいけないという想いが、当館と宮内庁正倉院事務所の職員たちにあった。

開催を実現するには三密対策が条件になる。例年正倉院展は十七日間で二十万人強の来館者がある。観覧者が二メートルの間隔で約一時間鑑賞すると仮定して、一時間の滞留者数を三〇〇人前後と割り出した。チケット購入の混雑を考えれば、ネット予約による日時指定券を用いるのが最適と判断し、当日券は販売しないことに決めた。総入場者数は例年の五分の一から六分の一程度になる。

日時指定を導入すれば、チケットを入手できない方が大勢いらつしやることになり、それが正倉院展に携わる者たちにとって大きな課題であった。また、コロナ禍にあり外出を避ける方も少なくないであろう。そこで、ネットで正倉院展を観覧できる動画を制作することにした。特別協力の読売新聞社と協力の読売テレビに全面的に支援いただき、当館学芸員がギャラリートークをしながら館内を解説する動画を制作した。4K映像による宝物は細部まで鑑賞することができ、家で正倉院展を楽しめると好評であった。

動画制作は博物館独自でも行った。いくつか作った中でも、正倉院宝庫における点



展示作業(奈良博チャンネルの動画より)

検作業、宝物の梱包作業（以上は正倉院事務所の撮影データを使用）、当館での開梱・展示作業の動画は、これまで一般に知られることのなかった正倉院展の裏側の作業を公開する初めての試みとして画期的であった【写真】。なお、例年海外から正倉院展を観覧に訪れる方も大勢いらつしやるため、多言語による正倉院展の解説動画も制作した（今回は試験的に韓国語版を制作した）。

もちろん、例年実施していたことを断念した例もある。ボランティアによる講堂での解説や、庭園を見ながらの抹茶の提供がそれである。前者は鑑賞前に解説を聞くことで理解が深まると好評であり、アンケートでは来年における再開を望む声が寄せられた。また、公開講座の聴講は人数を半分に減らし、ネットでの事前予約制とした。

長い正倉院展の歴史の中で、何もかもが初めての試みであった。開幕後の心配の種だった入館時の混乱と館内の三密、そしてクラスターの発生は、いずれも無事乗り切ることができた。これもマスク着用、会話禁止、ソーシャルディスタンス、消毒徹底などを呼びかけるスタッフの声に耳を傾けてくださった、来館者の皆様のご協力のためまものと厚く感謝申し上げる次第である。